さらに、物語は迷いこむ
物語は4つの顔をもつ
そして、物語は決着する
物語は4つの顔をもつ
やがて、物語は逆転する
物語は4つの顔をもつ
きっと、物語はよりそう
物語は4つの顔をもつ

きっと、物語はよりそう

物語は4つの顔をもつ

日本児童文学者協会・編
立原圭子・絵

001-007_yorisou_FMK_02.indd 1 2019/12/03 16:

きっと、物語はよりそう

目次 contents

関根って苦手　次良丸忍 ―― 7

ぬくぬくの百円玉　服部千春 ―― 31

バーチャルな初恋　工藤純子 ―― 55

瀬尾くんと歩く　中山聖子 ―― 79

シッポ友だち　吉田桃子 ―― 103

川のあるじ　最上一平 ―― 127

001-007_yorisou_FMK_02.indd 2-3　2019/12/03 16:50

物語は4つの顔をもつ

きっと、物語はよりそう

001-007_yorisou_FMK_02.indd 4-5 2019/12/03 16:50

関根(せきね)って苦手

次良丸(じろまる) 忍(しのぶ)

装画・挿絵

立原圭子

（たちはら　けいこ）

2013年、世界38都市からの公募で選ばれるAQUENTのカレンダーコンペでイラストを採用される。装画作品に『隅田川殺人事件』『やさしい猫の看取りかた』『ウホッホ探険隊』『蕎麦、食べていけ！』などがある。

編集委員：津久井惠、服部千春、宮川健郎、偕成社編集部

001-007_yorisou_FMK_02.indd 6-7 2019/12/03 16:50

ドキッとした。
ていうか、正確にはズッキンって感じ。
横にいた見知らぬおばさんに聞こえたんじゃないかと思うほどの、心臓の音だった。
こんなにびっくりしたのは、生まれて初めてかも。
まさか安売りスーパーのワンプライスで、同じ四年一組の関根総一に出会うとは。
「あ、島本」
わたしの顔を見るなり、関根は、ちっちゃく左手をあげた。
「うぐっ」
同じように左手をあげて答えたが、おどろきすぎて、首をしめられたような声しか出なかった。もう、まじはずかしい。わたしは口をとがらせ、ポテトチップスのならんでいる棚に目をそらした。
日曜日のお昼前。お父さんにたのまれて、お昼ごはん用のカップ焼きそばと太

巻きを買いに来たところだった。おつりでお菓子一つ買っていいというから、何にしようか、やっぱりあれかなとか思いつつお菓子コーナーをのぞいたら、そこに関根はいた。
関根は、なんか苦手だ。苦手というより、ちょっとこまるといったほうがいいかも。
「関根がさ、島本のこと好きらしいよ」
前にクラスで、こんなうわさが流れた。
わたしと関根が、たまたま同じ柄のTシャツを着てきたことに気づいた男子が、ふざけて聞いたら、そう話したという。
しばらくはバカな男子たちが、関根にむかって「島本」とか、ぎゃくにわたしを「関根」なんてよんだりしていたけれど、本当に低レベル。
無視していたら、つまらなくなったのか、いつのまにかいわれなくなった。
もともと関根のことなんて、なんとも思っていなかったから、うわさが消えてせいせいした。

008-030_yorisou_FMK_F1.indd 8-9 2019/12/04 9:21

でもどうしたわけか、わたしの心の中にひびく「関根がさ、島本のこと好きらしいよ」という声は、いつまでたっても消えてくれない。
だから、ちょっとこまる。ほんとに、まじで。
それにしてもどうして、緑が丘に住んでる関根が、わざわざ遠い愛宕町のワンプライスまで来たんだろう。
「プッチプチドーナッツ、さがしてるんだ」
わたしの気持ちを見すかしたかのように、関根がいった。
「あと一枚、シールほしいんだけど、うちの近所の店、どこも売り切れちゃってて……」
「あー」
関根の顔は見ずに、わたしはうなずいた。理由はわかった。プッチプチドーナッツの懸賞めあてというわけか。
パッケージについてるチワワのシール十枚で応募できて、一等がジェルネイルセット。十色のネイルカラーに、UVライトもついている本格的なものだ。わたしも、応募しようか考えていたから知っている。
えっ、でも関根がジェルネイルセットを？
そっと横目で関根の指先を見る。切ったばかりかな。つめがすごく短い。
「ネイルセット……ほしいの？」
たずねたら、こくりと関根はうなずいた。
「えー！」
ついあげてしまった大声に、関根は、びくっと肩をすぼめた。
「あっ、ほしいのは、ぼくじゃなくて。たのまれちゃったから。それで」
「あ……うん、やっぱそうだよね」
たのまれたと聞いて、少しホッとした。関根は、ネイルするようなやつじゃないし。
「そういえば、関根って、懸賞よく当たるんだよね」
「なんかわかんないけど、ちょっと運いいみたい」
関根のくじ運がいいことは、前からわりと有名だ。芸能人のサインや、映画の

008-030_yorisou_FMK_F1.indd 10-11 2019/12/04 9:21

チケット。最新ゲーム機なども当たったことがあるらしい。
参加賞や残念賞しかもらったことがないわたしから見れば、ちょっとどころか、とんでもなく運がいいと思う。
でも、自分の代わりに懸賞に応募させるなんて、そんなこと、よく思いつくなあ。お姉さん？　それとも妹？　お母さんってわけはないか。
しかし、シールがなければはじまらない。
「あー、この店もだめか」
棚を見つめて関根は、ためいきまじりにつぶやいた。
プッチプチドーナッツの値札がはってあるのに、品物はない。つまり売り切れ。
「応募のしめきりが近づいているから、だれかが買いまくってるのかも。あー、こまったなあ」
「ないんじゃ、しかたないよ。だいたい自分がほしいわけでもないのに、どうして関根がシールさがしてるの」
「落としちゃって」

008-030_yorisou_FMK_F1.indd 12-13
2019/12/04 9:21

「なくしたってこと？」
「シールの入ってた封筒を、うっかりさかさまに持って、部屋の中にまきちらしちゃったんだ。さがしたんだけど、どうしても一枚見つからなくって」
関根は、またためいきをついて、しゃがみこんだ。
「思いあたる店は全部さがしたのに、ひとつもないなんて……。ほかに売ってそうなとこ、あったかなあ」
あと一枚。たった一枚が、手に入らないんだ。
わたしより背が高いのに、しゃがんだ関根は、ひどくちっぽけに感じた。
そんな背中にむかって、つい思わずいってしまった。
「あげるよ、あのシールなら家にあるから」
「えっ」
ぽかんとした顔で、関根はわたしを見上げた。

＊

なりゆきというのは、ふしぎなものだ。
自転車をこぎながら、わたしは思った。
ほんの十分前までは、関根と二人で家に帰ることになるとは、思ってもみなかった。
特別なんとも思っていない関根だけど、こうしてサイクリングみたいに走っていると、どうしてか気持ちがわくわくしてくる。
なぜだろうと思っていたら、うしろから関根が話しかけてきた。
「島本の家って、消防署よりむこう？」
ちょっと待って。親しげに話しているところなんか、クラスのだれかに見られたら、また変なうわさがたってしまうじゃない。
ペダルをこぎながら、この近所の子たちの顔を思い出してみる。まあ、バカな男子たちはいないし、とりあえずだいじょうぶか。
でも、百パーセントへいきとはいえない。わたしは声には出さず、小さく首をふって返事をした。

008-030_yorisou_FMK_F1.indd 14-15 2019/12/04 9:21

しかし関根は聞こえてないと思ったらしく、さっきよりさらに大きな声で、同じことを聞いてきた。
「島本の家って、消防署よりむこう？　それとも近い？　あと何分ぐらいなの」
もう、こまったな。やっぱり関根って、ちょっと苦手。
けっきょく関根の質問に答えないうちに、家に到着した。
「ちょっと待ってて」
関根をそこに立たせたまま、わたし一人、かごのレジ袋を手に持って、玄関をあけた。
「お、思ったより早かったな」
キッチンのいすにこしかけ、スマホをいじっていたお父さんが、顔をあげた。
「なんだ、まだパジャマでいるの」
「パジャマじゃないよ。これはルームウエアっていうんだ。そうそう、さっきお母さんからラインがきたぞ。午後からは武志おじさんが病院に来るから、お母さんは帰るって」

「おばあちゃんの具合はだいじょうぶなの」
「血圧もおちついて、食欲もあるっていうし、もうへいきだろう。夕ごはんは予定どおり、みんなで回転ずしを食べに行けそうだ」
明日がわたしの誕生日なので、一日早いけど日曜の今日、家族三人でお祝いの外食をする予定だったのだ。
それがきのうの朝、となり町で武志おじさんと暮らしているおばあちゃんが、めまいがするというので入院してしまった。
「回転ずしは、べつに今日じゃなくてもいいよ。おばあちゃん、退院してからでもいいから」
「えっ、だけど、お母さんもそのつもりだし」
お父さんが、まゆにしわをよせたが、わたしは首を横にふった。
「その話は、またあとで。友だ……同じクラスの子、待たせてるから」
わたしは、カップ焼きそばと太巻きの入ったレジ袋を、ドンとテーブルにおくと、自分の部屋にかけこんだ。

008-030_yorisou_FMK_F1.indd 16-17　2019/12/04 9:21